原告団

遺族・CO裁判、災害責任追求、特集号

第二十一号

遺族・渡辺さんの その後

花と咲いた人間連帯

家族思いだった亡夫の面影

ニャン公

渡辺ミドリさんは、大事な夫をあの三川鉱炭じん大爆発でうしなった、未亡人と呼ばれる遺族のなかの一人。

住まいは、大牟田市四山町五十八―七三番地で、県境と呼ばれ、パチンコ店などが軒をならべている繁華街の裏手の路地。

昭和五年三月二十五日生れだから、今年ちょうど四十四歳。三井鉱山がとくに三池労組との約束で遺族の生活対策のためにと誘致した企業の一つ―三池縫製工場（大牟田市柿園町四丁目）に働いている。

同じ遺族の高橋シゲ子さんのお伴で、三月末のとある日の夕べのこと、ミドリさんの住まいをたずねた。

玄関の戸を開けた。と、何とまず出迎えてくれたのが二匹のニャン公だった。尻っぽをピンとはねあげ、足もとにもつれてはさかんに愛きょうをふりまいた。

聞けば親子とかで、母親の名前ると、彼はただニヤニヤと頭をかいた。

なるほど生きものを愛せずにはおれない家か。性格が、まる出しだな――つくづく思いながら合点した。事実、その通りだったが。

限りなき愛

ミドリさんの亡夫茂住さんは、昭和二年十一月十一日生れだったから、あの大爆発のために生涯の幕を閉じたのはちょうど三十六歳のときだった。ミドリさんに聞けば、「自分の葬式の日が、その誕生日と重なったのでした」というから、これはまた何という皮肉なことだったろう。

二人が結ばれたのが、昭和二十四年の三月十五日のこと。茂住さんが二十二歳で、ミドリさんが十九歳のときだったから、よっぽどかわいい花ムコ花ヨメだったに違いない。

「親同志が勝手にきめた結婚でしたから、私は最後までイヤイヤいうたとでした」、とミドリさんはいう――「ばってん、添うて見ましたら、こんなによいお父さんはありませんでしたから、今は思い残すことはありません」。

翌二十五年一月十七日には、長女（といってもひとり娘）のマスミさん誕生。熊大医学部付属の高等看護学院卒業後、ひきつづき同付属病院に助産婦として働いている。すでに婚約もととのい、よろこびの日を待っているところ。

二十七年一月十四日には、長男茂喜さん誕生。三池工業高校卒業後、今では大阪の一企業で働いている。もともと向学心の強い性格で、意を決して働きながら大学で勉強することになり、今年とある大学の夜間部の入学試験に見ごと合格。

「今生きていることが不思議」（ミドリさん）と思われるほど、生れつき体の弱かった茂喜さん。まだ幼稚園にあがる（それも一年遅れた）前のこと、小児腎臓などの重病が重なって、何回となく危

資本の手で、突然夫の命をもぎとられたミドリさんの悲しみは尽きないが、でもミドリさんには子どもたちのささえがある。（写真は、末つ子の隆幸君とともに）

ミーちゃん。子どもの方はオスでアサ君とか長助とかいうのだそうだが、ミーちゃんはまたお腹が大きく、彼女はその大きなお腹をゆすぶりながら歩くのだった。

この家は生きものがよほど好きだと見えて、ほかに亡夫ゆずりのバンという名の犬公もいる。大牟田南高校三年生の隆幸君は、「もう十七歳です」といって、ニコッと笑った。

「ミーちゃんは、やがてお産ですね」、と聞くと、ミドリさんのこたえがふるっていた。

「お産の時が大変なんですよ。私達の顔を見ては泣くでしょう。お腹をさすってくれ、というわけですね。

ばってん私はかわいそうで見ておれませんから、いつもお産の手伝いはこの子ばかりですたい。

それにこの子おかしいですよ。ミーのお腹をさすってやりながら『なし、おまえがさかるか。さかるけんばっかりで、きつかめに合わんなんとやろが。またからはさかるな』。こうでしょう。オホホホホホ」

「ほんとか隆幸君」、とたずねると、彼はただニヤニヤと頭をかいた。

なるほど生きものを愛せずにはおれない家か。性格が、まる出しだな――つくづく思いながら合点した。事実、その通りだったが。

「今生きていることが不思議」（ミドリさん）と思われるほど、生れつき体の弱かった茂喜さん。まだ幼稚園にあがる（それも一年遅れた）前のこと、小児腎臓などの重病が重なって、何回となく危

水俣労組の安定賃金反対闘争のとき、オルグとして活動もした茂住さん。（まんなかの人）

寵となり、「あるときなど、お葬式のためのお金さえ準備したほどでした」とはミドリさん。

「それでも幼稚園から小学校、中学校、それから高校とずーっと成績がよかったものですから、父ちゃんのいない家のこと、口でこそそれといいませんでしたけど、内心では大学にすすみたいことがあ、父ちゃんといっしょにのもうね」、と煎じてのんだはよかったが、それを病んでもない自分がのみ過ぎては、「吐くだけ吐いて」（ミドリさん）、「俺の方が死ぬほどだ」と苦しんだりした。それどころか寒い冬もいとわず、山のなかの寺にまいっては、子どもの病気平癒を祈って水ごりをとったこともめずらしくはなかった。子ども思いは、限りがなかった。

母親の私にはわかり過ぎるほどわかっていましたし、それがこれまで心残りでなりませんでした。こんど夜間部だとはいえ、大学で勉強できることになりましたので、半分ほどは気持もはれました」。

ミドリさんは、それでもくやしさをぬぐいきれぬと見えて、さかんに涙をふくのだった。

それにしても忘れられないのが亡夫茂住さんのことで、ミドリさんは「この父がいなかったなら、茂喜のいのちは恐らくはなかったと思います」と語る。それもそのはずで、茂喜さんの幼い命を助けようと、茂住さんは、あっちによく効く漢方薬があると聞けば、たとえどんなに遠くても薬買いに走り、山ごぼうの根を煎じて飲むがよいと聞けば、山を歩きまわり、山ごぼうの根を掘ってきて、「さ

泣き笑い

あの会社の体育館で、あの日「とうちゃんの遺体を見つけたときの、子どもたちの泣きようはありませんでした。私の実母が、『どげんすれば泣きやむじゃろか』、と心配してくれたほど」だったというが、あの日から早や十年を過ぎると、末っ子の隆幸さんもこんなことをいうとしごろにまで成長した。

ついこのごろ、民放が木曜日の夜放映している、水前寺清子主演の〝ありがとう〟というホームドラマを二人して見ていたときのこと。その夜のブラウン管は、そのドラマのなかの母親が新しい男の人と再婚するシーンを伝えていた。

いっしんに見ていた隆幸君、何を思ったか母親ミドリさんの方を見てふといった。

「母ちゃんもほしかろ」

「何が、ね」

「恋人たい」

「恋人？」

「この〝ありがとう〟のおかあさんのごつ、結婚しゅうごたろうもん」

あきれ返って、言葉もなく息子の顔をただ見つめているミドリさんに、隆幸君は続けていった――

「母ちゃん、化粧品でん、俺に心配はいらんけん買えよ。姉しゃんにでん兄イしゃんにでん、ひと口でんいわせんよ。母ちゃんの十年間を、俺がちゃんと見てきたからね」。

語りながら、ミドリさんはあふれ出る涙をふきもやらず、泣き笑いで顔をくしゃくしゃにした。

「考えて見てください。あんなにも子ども思いだったお父さん。私をだいじにしてくれたお父さんを、私がなんで忘れるもんですかね。子どもたちが盆・正月には必ず帰ってきますが、そのたびに私はいってやります。『あんたたちは、たとえ私の恩は忘れてもよかが、お父さんの恩だけは忘れないようにね』と。ほんとに、よい父親であり、よい夫でした。その主人を殺されたのですから」

突然大事な大黒柱の命が消えたこの一家の十年間。苦しみは言語に絶するものがあったろう。だがそれだからこそまた、いっそう美しい人間連帯（おっと、ワン公やニャン公たちもいたのだ）が花と咲いた、この一家のしあわせを思わずにはいられないのだ。

× ×

次男隆幸君

末っ子の次男隆幸君は、三十一年七月一日の生れ。大牟田南高校に通いながら、母親のミドリさんを無心にささえて生きている。

おかげで料理はお手のものだとのこと、たまたまたずねた日も、花がらのエプロン姿で炊事場に立ち働いていた。フライパンを上下にふりふり煮たきする姿は堂にいっていたが、ミドリさんは笑いながらいうのだった――「あのエプロンは、自分の専用ですよ」。

「えらいではないか」と声をかけると、炊事場から元気な声が返ってきた―「自分でたかんと、いつまでん飯は食えんもんね」。

首をすくめるミドリさん。残業でとかく帰りが遅くなる母親ではいつの間にか身についた芸当かも知れない。

ミドリさんに聞けば、隆幸君はある日いったという。「母ちゃん俺は結婚したっちゃ、嫁ごは勤めには出さんばい。結婚してからどま飯はたこうごつなかよ」。「通信簿にはいつも朗らかな性格と書いてありますばってん、内心にはカギっ子のさびしさがよっぽどこたえとるとでしょう」、とミドリさんはうなずくのだった。たしかにそうに違いない。